

沼津市若山牧水記念館

第33号

2004.9.25

編集・発行 社団法人 沼津牧水会
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX 055-962-0424
http://web.thn.jp/bokusui/



犬山焼きの「爛鍋」と「茶碗」

秋の夕べ、火鉢の

五徳に爛鍋かんなべを載せ、
良い加減に爛がつか
頃合いを待ちながら、
多忙だった一日をゆ
つくり反芻する。牧
水にとつてそんな夕
暮れは、至福のとき
であったらう。

牧水が沼津に移り
住んだのは大正九年
この爛鍋はそれから
二年後に手に入れた
ものである。

大正十一年、牧水
は元旦から土肥温泉
に遊び、三月には天
城湯ヶ島に滞在して
「山桜の歌」をもに
し、六月には裾野須
山を散策している。
九月十七日に名古屋
の歌会に招かれて出
席。翌十八日、犬山
城に遊び、犬山焼き

の工房に立ち寄って陶芸に興じた。この時絵付けをした爛鍋
と茶碗が当館に展示されている。爛鍋に書かれている歌は、

時をおき老樹おいきの零落こぼつるごと静けき酒は朝にこそあれ

で、大正四年に栃木の喜連川きつれがわに高塩背山たしほを訪ねた折りの作品
である。背山は、本名正庸まさむね、神職と同時に教職にもあり、「創
作」の有力な同人であった。高塩背山との酒宴は「朝は朝屋
は昼とて相酌みつ離れがたくもなりけるかな」といった調
子で、歌集『砂丘』に「友と相酌む歌」として載っている。

犬山焼きの工房で爛鍋に歌を書こうとした時、牧水の胸中
には楽しかった背山とのやりとりが彷彿とし、その楽しかつ
た日々を再びとの思いに駆られてこの歌を選んだのだらう。

一方、茶碗には、犬山で詠んだ歌（歌集『山桜の歌』所収）
桑畑の中をすぎ来てかへりみる犬山の城は秋霞せり

が書かれている。犬山で詠んだその他の歌を紹介する。

犬山の城に登り立ちわが見るや尾張だひらの秋のくも
りを

立ち入れば陶器すゐものづくりが小屋のうちうす暗き奥に素
焼はならぶ

並べたるなかゆとりいで塵を払へばましろなるかも素
焼の甕かめは

とりどりに影を落してならびたり陶器すゐものづくりが庭の
白甕しろかめ

火を入れぬ竈かまどのすがたのさびたるに射して静けき秋の
日のかげ

なお、爛鍋は温古堂田中旭氏から、茶碗は高橋希人氏たかねから
寄贈されたものである。（須永 秀生）

牧水と小諸

田村志津枝

◇深まりゆく秋

明治四十三年の九月半ばから二カ月余り、牧水は信州の小諸に滞在した。二十五歳のときである。このときの小諸での様子は、関係者の多くが早世したせいもあるうか、これまであまり明らかにされて来なかった。

牧水は、この年の三月に雑誌『創作』を創刊して大きな反響を呼び、四月には第三歌集『別離』を出して称賛を浴びていた。とくに青年たちには人気が高く、『創作』への投稿は月を追うごとに増え、編集部の方に山をなしたという。そんな順風満帆の東京での生活を捨て、浅間山麓の田舎町小諸にたどりついた牧水は、いったいどのような日々を送っていたのだろうか。

九月十三日の夜十時過ぎ、小諸駅に着いた牧水を迎えたのは、岩崎櫻郎（いざなざくら）という医者だった。『創作』誌上には「暫く旅に出てみたいと思ひ立つた」などと気楽そうに書いていた牧水だが、実際は体調がひどく悪かった。だからこの旅の目的は、まずは岩崎に会って体をよくすることではなかったかと、私は考えている。山国の小

諸では、八月半ばを過ぎれば、もう朝晩は吹く風も肌冷たい。それなのに、牧水は夏の浴衣姿のまま寒さに首をすくめていたという。岩崎は自分が住み込みで働いている病院に牧水を案内し、自室の隣に泊めた。そしてそこにそのまま牧水は住み込みで働いていたことになる。

その病院というのは、北国街道に面した大きな木造三階建ての旧本陣で、任命堂田村病院とあった。今では想像もつかないが、当時は前の道は鬱蒼たる松並木だったそう。その院長が私の祖父なのだが、牧水がいることに気づいたのは、毎日の郵便物が急が増えたせいだという。牧水はどうやら当主に挨拶もせぬままに、『創作』宛ての郵便物を転送させ、あてがわれた部屋で歌を詠み、原稿を書き、あるいは投稿欄の選歌などに精を出していたことになる。

牧水の部屋は、西の方角に眺望が開けていた。遙かな日本アルプスの峰々には薄く雪がつもり、浅間山や高峰高原の広大な裾野は落葉松林が早や黄金色に色づいている。紅葉は隣く間に里へと駆け下り、庭木まで深紅に染めてゆく。牧水は日々深まりゆく秋色を堪能したにちがいない。

本陣の庭を通りぬけて裏木戸を押せば、そこはもう浅間山麓から千曲川へとつらなる、すずやかな雑木林だ。次第に健康を回復した牧水は、二里三里を軽々と歩いて山の温泉や村々を訪ね、十月末にはついに浅間登山まで果たしている。当時、浅間山は火山活動が盛んで、しょっちゅう火を噴いていた。その取材をする新聞記者宮坂古梁（みやざきふるら）に牧水は同行したらしい。



牧水が滞在した任命堂田村病院（旧本陣）（重要文化財）

◇ 藤村の教え子たち

小諸に着いた翌日さっそく、牧水は本陣から歩いて五分ほどの城趾公園「懐古園」に足を運んでいる。島崎藤村の「千曲川旅情のうた」で知られる場所である。藤村は明治三十八年までの六年間小諸に滞在し、小諸義塾の教師をしていた。この間に詩人から小説家へと脱皮をはかった藤村の静かな情熱は、少年たちに強い印象を残し、多くの文学好きを育てた。彼らを中心として、歌や文学のグループがいくつもあった。土屋残星(総蔵)は、藤村の『破戒』のために「千曲川流域の図」を作成した少年として知られている。『創作』では創刊号から投稿欄の常連となっているが、当時は二十二歳ですで一児の父、農業を営む家長であった。残星はある日岩崎のもとから牧水を呼び出し、自宅へ招いた。高原の広い空の下、日々火山灰地を耕しつつ歌を詠む生活の場だ。残星は牧水と語りあった一夜の、心はずむ思い出を書き残している。

やはり藤村に生涯私淑して多くの著作を残した林勇は、当時小学校教師で、歌の同人誌『白閃集』を主宰していた。同僚の国画家教師茨木猪之吉を誘って、本陣の一室に牧水を訪ねている。茨木は、山岳画家を目指して小諸に住みついたばかりだった。最期は画道具を背負ったまま日本アルプスの山中で消息を絶ったという人だが、牧水とはとても気が合ったようで、時折、牧水

の部屋に泊まったりしている。

つきあいはどんどん広がり、たちまち酒仲間もできた。岩崎樗郎にいくら禁じられても、牧水は飲んだ。悪いことに本陣の一軒おいた隣は、元禄期に創業した古めかしい造り酒屋だった。駅前のおぎみ屋は、牧水らの行きつけの店になった。茨木は「夕方になると学校に牧水から誘いの電話がかかって来た」と書き残している。名だたる酒豪が顔をそろえ、昼夜を徹しての酒宴もあったようだ。洋行の準備のため上田近くの実家に戻っていた画家で版画家の山本鼎、牧水の第一歌集『海の声』の表紙を描いた平福百穂、小諸近郊の望月の書家比田井天来らが、はるばる集まり、牧水を囲んで小諸や上田で飲み明かしている。



山本鼎宅での歌会 (明治43年10月)
前列右から若山牧水、山本鼎、後列左から二人目が山崎城

私の家では祖父も父も酒は飲まなかった。酒の気がまったくない、しんと静まりかえった夜、ひどく厳格で短気な面があったそうだ。大きな病院を取り仕切って、日々緊張のうちに働きつけていたのではないだろうか。岩崎樗郎も酒は飲まない温厚な人で、就寝前二時間の読書を欠かさないといった生活態度だったらしい。

そうした屋敷の一角に牧水が住まい、酔っぱらった赤い顔で、しばしば階段から転げ落ちてすり傷をつくっていたなどは、ちよつと信じられない気もする。しかし牧水は、ときには飲み仲間を誘われて数日部屋を空けたり、また岩崎が所用でしばらく不在のときは留守番を自稱したりして、気ままに本陣で暮らした。

◇ 違和感と愛着と

冬が間近に迫った十一月半ば過ぎ、牧水は挨拶もなく小諸を去った。小諸に来る前からすでに末路に入っていた恋人との間に、急用が持ち上がったのだ。どうやら牧水は東京で用事を片づけた小諸に戻り、そこから越後へと旅するつもりでいたらしい。だがそれは、ついになわなかつた。荷物も部屋に置いたままだったというから、牧水が残した絵葉書や写真のたぐいが、今でもまだあの本陣か土蔵の片隅に眠っているのではないかと考えたりするが、いまだに調べはついていない。

その後も牧水は、たびたび小諸やその周辺を訪れている。そして次第に、信州は牧水の活動にとつて重要な場所になっていく。牧水は小諸での日々を振り返って、「あの短い間が、どうして僕の一生に取つてはかりそめならぬ質量をもつてゐるらしい」などとも書いている。そんな文章を読みながら、私自身にもう遠くなつてしまつた故郷を思い起こすとき、私には牧水がある地に抱いたであろう違和感と愛着が、分かるような気がする。

明治四十三年に話を戻してみよう。小諸を去つた牧水は、友人のたくさんいる東京で、それまでの酒と野歩きの日々がウソのようにひどい苦境に陥つた。恋人との軋轢、経済的な行きづまり、体調の悪化などが重なつたのだ。この時期の牧水は自殺でもしかねない様子だつたと、中学生のとき小諸で牧水に出会い、あとを追うように上京した山崎斌は書き残している。それを断ち切つたのが喜志子との新しい生活だつた。喜志子は牧水の熱烈な求婚にあい、家出同然に上京したというが、そんなところに牧水は、小諸の土屋残星に宛ててこんな手紙を出している。

この月の初めから、白夜集当時にでも御存じですか太田喜志子といふのと結婚して、表記の所へ隠れ棲んでゐます。

残星と喜志子は同じ信州の厳しい自然に囲まれて歌に熱中した歌仲間だつた。若い日の喜志子を知る人に、牧水は自分の喜びを伝えたかっ

たのだらう。

私は若山喜志子について、それほど多くを知らない。けれども牧水に関する書物を読むうちに伝わってくる喜志子は、まことに信州の女性だと思わせられる。地道な頑張り屋で、冷静な反面、心の奥底に熱い火を守りつつづけている。いささか煙たいほどのしつかり者だ。

歌人で他の職業を持たない人は、牧水の時代にもごく少数だつたというが、そのせいで牧水の経済的困窮は長くつづいた。喜志子は時には針仕事までして生活を支えたと、沼津市若山牧水記念館の榎本篁子館長(牧水の孫)からお聞きしたことがある。そのようななかでも喜志子は決して歌を手放さず、そればかりか、生涯にわたつて大酒飲みであつた牧水に寄り添いつつ、同時に牧水に対する厳しい批評眼をも失わなかつた。

喜志子は、牧水の死後に、牧水の信念たる「自己即詩歌」について、こんな意味のことを書いている。これは言い換えれば「生活即芸術」ということで、これでは実生活では矛盾にぶつからざるを得ない。そのことをごまかすかのようには、牧水は「さびし」「かなし」の言葉をつかつている場合がある、と。

小諸での牧水にまつわる話を探っていると、今なお時折、この喜志子の視線とよく似た小諸の人々のまなざしを感じることもある。それはそうだろう。駆け足でやつてくる厳しい冬に備

えて薪や漬物の準備に余念のない人のかたわらで、何することもないふうには山野を歩きまわり、夜な夜な酒に酔いしれていた牧水なのだから。けれど、小諸の青年たちはそんな牧水に呆れつつ、うらやみ、また、いとおしんでいたように思う。牧水の方はどうかといえば、地道に日々の生業に励む小諸の頑固な人々をうらやみはしなかつたかもしれないが、心のどこかに刺さつて気にせずにはいられないトゲのような感じを抱いていたのではないだろうか。何と言おうと、そのようにして実生活は支えられていることを、さすがの破天荒な牧水でも、気づかぬはずはないからだ。



【筆者プロフィール】

昭和一九年
台湾台南市
に生まれ、
小諸市で育
つ。早稲田
大学文学部
卒。ノンフ
イクション
作家。映画

制作に携わる傍ら、台湾などの映画作品を日本に紹介。牧水の小諸時代を扱った『若山牧水 さびしかなし』(晶文社)を昨年十一月に著した。本年六月に当館で催した「青春の牧水」と題する講演は大好評でした。